

## 第 23 回日亜経済合同委員会 概要報告

1. 開催期日： 2014 年 12 月 4 日(木)– 5 日 (金)
2. 開催場所： アルゼンチン共和国 (ブエノスアイレス) 「ホテル エンペラドール」
3. 出席者： 総勢 192 名  
＜日本側＞ 佐々木幹夫・日亜経済委員会会長 (日商特別顧問、三菱商事(株)相談役) はじめ 96 名  
＜亜側＞ カルロス・デ・ラ・ベガ・アルゼンチン商業会議所会頭、アンヘル・マチャード・亜日経済委員会会長はじめ 96 名
4. 総括的概要：



会議の様子

今回の会議は、前回 2010 年 1 月の東京開催以来 5 年ぶり、ブエノスアイレスでは 8 年ぶりの開催となった。

アルゼンチンは、民間債務のテクニカルデフォルトなどの課題を抱えているものの、今年 7 月にパリクラブへの第一弾の債務返済を実行し国際金融市場への復帰を図るなどビジネス環境改善の兆しが見えてきている。また 2015 年 10 月の大統領選挙によりアルゼンチン政府の政策が大きな転機を迎える可能性がある。こうした中、金属資源や食糧資源

が豊富でエネルギー、インフラなどの分野でも潜在力の高いアルゼンチンとの関係を深めるべく合同会議を開催することとなった。

議論を通じてアルゼンチンの潜在力とビジネス上の魅力を再認識し両国のビジネス関係強化の必要性を実感することとなった。また両国の参加者からはメルコスールと日本との自由貿易協定 (F T A) 促進を求める声があつた。

### 5. セッション別会議概要：

#### (1) 開会

カルロス・デ・ラ・ベガ・アルゼンチン商業会議所会頭と佐々木幹夫・日亜経済委員会会長 (三菱商事(株)相談役) の開会挨拶の後、水上正史駐アルゼンチン日本国大使により「日本とアルゼンチンは相互補完的な経済関係にあるが、その現状が両国の経済潜在力を十分反映したものになっていない。両国の間に存在する潜在力を最大限活用するため、実りある議論を期待する」との安倍首相の祝辞が代読された。



開会式の様子

#### (2) 第 1 回全体会議「アルゼンチン経済政策の現状と今後の方向」



ジョルジ工業大臣による基調講演

デボラ・アドリアナ・ジョルジ・工業大臣が基調講演を行った。講演では、過去 10 年間で両国の貿易が 3 倍に増加したことを指摘し、両国は強力な補完性があり、今後、貿易や投資がさらに大きくなっていくとの見通しを語った。同国の輸出全体のうち、工業製品輸出は 2013 年に 70% を占めており、引き続き工業化を

推進すると同時に、今後は産業の多角化を目指し、農業機械導入による農業生産の拡大、シェールガスへの投資によるエネルギーの自給自足、ソフトウェアやバイオテクノロジーなどの知識集約型分野等にも注力していく旨の考えを示した。また、日本にとってアルゼンチンは、メルコスール（MERCOSUR=南米南部共同市場）やウナスール（UNASUR=南米諸国連合）各国へ輸出するプラットフォームとして、また、アルゼンチンにとって日本は、食糧・エネルギー等を東南アジア諸国へ輸出するプラットフォームとして、補完関係を強くしていくことができるとの考えを示し、こうしたことを実現していくには、両国の政治的意思が必要だと述べた。

### （3）第2回全体会議「両国経済の現状と展望」

ヴィクトル・ドソレツ氏（アルゼンチン商業会議所・理事）と内野貴司氏（㈱三菱東京UFJ銀行ブエノスアイレス支店・支店長）が議長・副議長を務めた。

オーランド・フェレーレス氏（OJF アソシエイト社・代表）、長島忠之氏（日本貿易振興機構・理事）の両氏がスピーチを行った。

フェレーレス氏は、アルゼンチンの世界の中での位置づけを説明した上で、同国の経済動向に関して、2015年の見通しと、2015年—19年の展望について予測した。2015年10月の大統領選挙のどの候補者も穏健派であるので、2016年以降は市場経済に近い合理的な経済を目指すことが見込まれ、アルゼンチン経済は改善する見通しと分析した。

長島氏は、本年4月の消費増税により2四半期連続のマイナス成長になったが日本経済は底堅く推移していると分析した。貿易収支赤字の一因は、日本の輸送・電気機器産業等の海外生産へのシフトが進展しているためとした。自動車産業については、今後も高い海外生産比率を維持し「地産地消」傾向は継続するとの見方を示した。またメルコスールをよりビジネスフレンドリーな形に変革させることが、競争力強化やグローバル・バリューチェーンへの参入拡大につながるとし、アルゼンチン政府や産業界関係者にそのイニシアティブ発揮を求めた。



OJF アソシエイト社・フェレーレス代表(第2回全体会議)

### （4）第3回全体会議「メルコスール域内のビジネス展開」



第3回全体会議の様子

エンリーケ・ディアズ氏（アルゼンチン食品工業会・財務担当理事）と野村知宏氏（アルゼンチン三井物産・社長）が議長・副議長を務めた。

オスバルド・カプリニ氏（アルゼンチン食品工業会・副会長）、ダニエル・A・エレーロ氏（トヨタ・アルゼンチン社・社長）の両氏がスピーチを行った。

カプリニ氏は、2013年時点で、食品輸出国としてアルゼンチンが全世界で11位、日本は食品輸入国として世界4位であると述べた。日本は食品輸入先の多角化を政策的に進めているものの、アルゼンチンは日本の輸入相手国として25位、0.69%を占めるに過ぎないと語った。本来あるはずの両国の補完関係を活かして経済関係を強化していくためには、日本とメルコスールとのFTAを進めていく必要があるとの見解を示した。

エレーロ氏は、トヨタ自動車はラテンアメリカ域内で9%のシェアを占めて、ラテンアメリカ域内では、アルゼンチンの工場では商用車を生産し、ブラジルで乗用車を生産するという棲み分けを行っていることを説明した。また、ラテンアメリカの自動車産業に関して、29%は域外から輸入されているものであり、その分の需要を域内で生産したもので吸収できれば、ラテンアメリカの自動車産業がさらに発展するとの見解を示した。

#### (5) 第4回全体会議「アルゼンチンのエネルギー資源（シェールオイル・ガス、再生可能エネルギー）」

ウーゴ・エウルネキアン氏（コーポラシオン・アメリカ社・副社長）と岩谷政史氏（アルゼンチン住友商事会社・社長）が議長・副議長を務めた。

フェルナンド・ジリベルティ氏（YPF 社・戦略事業開発担当副社長）、ホルヘ・フェリオリ氏（世界エネルギー会議アルゼンチン委員会）、村松秀浩氏（石油天然ガス・金属鉱物資源機構ワシントン事務所・所長）の3名がスピーチを行った。

ジリベルティ氏は「非従来型シェール資源開発」と題してスピーチを行った。YPF 社はアルゼンチンで採掘される石油・ガス市場の60%を占めている。アルゼンチン国内のエネルギー消費量のうち、石油・天然ガスは86%を占めており、そのうち半分が天然ガスとなっている。国内のシェールガス・オイルの埋蔵量は従来型資源と比べてはるかに大きく、開発の余地が大きいと述べた。また YPF 社は、国内ではまだ進んでいないオフショア開発や風力、地熱、水力といった再生可能エネルギー分野にも取り組んでいくと説明した。

フェリオリ氏は「アルゼンチンの石油・ガスの将来」と題してスピーチを行った。アルゼンチンの技術的に回収可能なシェールガスの埋蔵量は世界で2位と説明した。アルゼンチンが2030年に向けてエネルギーの自給自足を実現するためには、シェールガス・オイル開発の拡大が必須だが、エンジニアの不足や費用対効果、技術的な問題など課題が多い。多量のシェールガスが埋蔵されるバカムエルタ層への開発投資とともに、エネルギー効率の高い日本の技術を組み合わせることができれば、エネルギーの自給自足を実現できるとの見方を示した。

村松氏は「日本のエネルギー戦略」と題してスピーチを行った。2011年の福島原発事故以降、原子力が利用できなくなり、日本のエネルギーのLNGの比重が30%から50%に増加していると説明した。こうした中、ガス価格が従来の石油価格連動方式以外に、シェールガス開発が進むアメリカ国内の安価なガス価格と連動する方式など価格面での多角化の道が開け、供給先の多角化でも、従来の中東・豪州以外に、米国、カナダ、メキシコ等と開発を進めている。今後は、埋蔵量世界第2位のアルゼンチンとも協力していくことが必要と述べた。

#### (6) 第5回全体会議「金属・鉱物資源とインフラ」



豊田通商(株)・荒木常務執行役員（第5回全体会議）



第4回全体会議の様子

ホルヘ・エンリーケ・レベロー氏（日亜経済委員会アルゼンチン側委員会・事務総長）と式部透氏（米州開発銀行・アジア事務所長）が議長・副議長を務めた。

ダニエル・メイラン氏（前鉱山庁長官）、荒木良文氏（豊田通商(株)・常務執行役員南米地域担当兼豊田通商ブラジル・社長）、十時憲司氏（独立行政法人日本貿易保険・営業第二部長）、ニコラス・ポッ



セ氏（アコンカグア・コンソーシアム・ダイレクター）、ホルヘ・バルガス氏（NEC アルゼンチン LATAM IT ソリューションセンター・ビジネスダイレクター）の5名がスピーチした。

メイラン氏は「アルゼンチンの金属・鉱物資源の潜在力」と題してスピーチを行った。アルゼンチンの鉱物資源は、銅・モリブデン、金、ニッケルなど。鉱業開発は外国からの投資が85%を占めている。開発企業は89年の4社から現在は157社（うち、外国企業は133社）、生産量は10倍に増えている。90年代にアデス山脈を挟んだ鉱床でチリ側との共同開発が進み、外国からの投資も拡大した。新政権（2015年10月大統領選挙予定）は、外に開かれた政策をとることが見込まれ、外国からの鉱業開発投資は一層増加するとの見解を示した。

荒木氏は、「リチウム資源開発」と題してスピーチを行った。アルゼンチン北西部オラロス塩湖におけるリチウム資源開発・生産事業について発表した。リチウム資源は、ハイブリッド自動車、電気自動車、コンピューターやスマートフォンなどの電源として需要の拡大が期待されている。オラロス塩湖でのリチウム資源開発・生産事業は、亜日両国政府のバックアップの下、豊田通商の他、豪州のオロコブレ社、アルゼンチン・フワイ州鉱業公社が出資し2014年11月から開始した。豊田通商が全ての販売代理権を有している。生産量は世界市場の15%に相当し日本、韓国、中国、北米、欧州向けへ輸出する予定と述べた。

十時氏は「日本の貿易保険」と題してスピーチを行った。日本貿易保険（NEXI）のラテンアメリカでの貿易保険引き受け案件は、豊田通商のアルゼンチン・オラロス・リチウム開発、住友金属鉱山、住友商事のチリ・シエラ・ゴルダ銅鉱山、JX 日鉱日石金属、三井金属鉱業、三井物産のチリ・カセロネス銅・モリブデン開発など。アルゼンチンのホールドアウト債権者問題が解決に向かい、ビジネス環境が改善すればNEXIの保険引き受けは拡大すると述べた。

ポッセ氏は「トランス・アンデス・トンネル計画」と題してスピーチを行った。本プロジェクトが実現すれば、両国間を4時間（現状はトラック輸送で12時間）で結び、年間7,700万トンもの鉄道による大量輸送が可能となる。アジア・環太平洋地域につながる大量輸送路として、アジア市場に穀物を大量に輸出しているアルゼンチンには大変大きなメリットとなる。計画対象地域は1億2,600万人の居住者を有し、南アメリカ大陸のGDPの70%が集中しており、輸送路が繋がればラテンアメリカ全体への経済的なインパクトは大きいと述べた。

バルガス氏は「セーファー・シティーズ～安全・安心な社会を実現するためのICTの活用～」と題してスピーチを行った。都市住民のより良い生活を実現するために、IT/ICT技術を利用して、効率性、持続可能性、安全性の観点から、スマートシティ化の必要性を訴えた。スマートシティ化の一環として、NEC アルゼンチンは国内に研究開発拠点を設置し、ラテンアメリカ各都市の治安に関するサーベイランス・情報分析を行っている。警察・消防・病院等の関係機関と技術を共有活用することで、都市の安全を維持できると述べた。

## （7）閉会

両国経済委員会会長より閉会挨拶があり、マチャード会長からは合同会議を長く継続することの重要性が述べられ、今回の会議開催に関わったスポンサー各社をはじめとする関係者への謝辞が述べられた。佐々木会長からは、今回の会議が多数の参加者を得て盛大な会合になったこと、これをもとに今後一層両国間の協力や経済関係が拡大していくことを期待するとのコメントがあった。



閉会式の様子

## 6. その他

### (1) カピタニッチ官房長官への表敬訪問 (12月4日)



カピタニッチ官房長官への表敬訪問

合同会議の前日、佐々木会長は、大統領府でホルヘ・ミルトン・カピタニッチ官房長官への表敬訪問を行った。エクアドル・グアヤキルでの UNASUR 首脳会議出席のため不在のフェルナンデス大統領の「日亜経済委員会や両国企業の投資拡大を通じて両国関係を一層強化していきたい」とのメッセージが佐々木会長に伝えられ、アコンカグアプロジェクト、

アルゼンチンの債務問題等の現状や見通し、今後の有望な投資分野等について説明があった。表敬訪問には水上大使らも同行した。

### (2) 日本大使主催レセプション (12月4日)

合同会議の前夜、水上大使主催レセプションが大使公邸で開催された。水上大使、佐々木会長の挨拶の後、河野浩之 在亜日本商工会議所会頭による挨拶・乾杯があり、両国経済委員会関係者が懇親を深めた。



日本大使主催レセプションで挨拶する水上大使

### (3) アルゼンチン側委員会主催昼食会 (12月5日)

ゲストスピーカーとしてカルロス・ビアンコ外務省次官がスピーチをした。ビアンコ次官は、アルゼンチンの経済力向上のために日本との関係強化が重要と



アルゼンチン側主催昼食会で講演するビアンコ外務省次官

の見方を示した。そのためにアルゼンチンが実行すべき事項について、グローバルな視点、マクロ経済的な視点、ミクロ経済的な視点という3つの視点から解説した。グローバルな視点として外貨の獲得、マクロ経済的視点からは投資・貿易の質を高めること、ミクロ経済的視点としては日本企業からポストフォーディズムの生産方式やサービス等を学ぶことが必要と述べた。

以上